

第 58 回日本人類遺伝学会

宮城県、2013. 11. 20-23

#### 胚盤胞の形態評価と胎児染色体異常の関連

松本由香、赤松芳恵、佐藤学、橋本周、姫野隆雄、井上朋子、伊藤啓二郎、中岡義晴、森本義晴

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

【目的】体外受精において胚の形態評価は、移植する胚の選択基準であり、妊娠に結びつくかどうかを予測する指標となる。胚盤胞の形態評価は、Gardner 分類に基づき発育速度(グレード BL1-6)と、内細胞塊(ICM)および栄養外胚葉(TE)の細胞状態(良好、普通、不良)によって行い、これらの評価は妊娠率、流産率に影響を与えられている。本研究では、胚盤胞の形態評価と、妊娠初期流産の主因である胎児染色体異常との関連について検討した。【対象と方法】2004年1月から2012年12月までに当院にて胚盤胞移植を実施し流産と診断され、絨毛染色体検査を行った181症例(Day5:129症例、平均年齢 $35.7 \pm 3.7$ 歳、Day6:52症例、平均年齢 $36.3 \pm 4.0$ 歳)を対象とし、移植胚盤胞のグレードと染色体異常率について検討した。【結果】Day5の染色体異常率は74.4%(96/129)となり、そのうちBL3で66.7%(16/24)、BL4で81.5%(44/54)、BL5で69.8%(30/43)、Day6の染色体異常率は59.6%(31/52)となり、そのうちBL3で100.0%(3/3)、BL4で73.7%(14/19)、BL5で46.7%(14/30)と全てのグレード間で差は認められなかった。ICMが良好な胚盤胞は、染色体が正常な胚盤胞のうち25.0%(13/52)、染色体が異常な胚盤胞のうち24.0%(29/121)に認められた。また、TEが不良な胚盤胞も、染色体が正常な胚盤胞のうち23.1%(12/52)、染色体が異常な胚盤胞でも28.9%(35/121)で差はなかった。【結論】Day5、Day6それぞれ発育速度による染色体異常率に差はなく、染色体異常の発生頻度との関連は認められなかった。また、TEの形態評価と胎児染色体異常の関連は認められなかった。